

## 観念・性質・実体——ロックの場合

土 屋 純 一

### 一

物理的世界と、ある意味でそれに先立って与えられている直接の経験との関係はどのように理解すべきか。ロックの哲学においてもこの問題は、大まかにもせよ率直な形で考えられていると思われる。われわれはこの問題を、一種の哲学史常識として固定され、時には誤解すらされている、第一次性質と第二次性質の区別の論を見直すことから出発して考えてみたい。

ロックによると『物体 (bodies) の第一次性質の観念はそれら物体に似たもの (resemblance) であり、観念の原型 (Patterns) は物体そのもののうちに実際に存在するのであるが、第二次性質によってわれわれのうちに生み出される観念は全然物体に似たものではない。……第二次性質は、その感覚をわれわれのうちに生み出す力 (Power) にすぎないのであって、その性質によってわれわれは物体に名をつけるのである』(An Essay concerning Human Understanding, II. viii. 15)<sup>(1)</sup>と言われている。

この行文は次のように解されることがあるようだ。すなわち前半では、物体には第一次性質と第二次性質という二種類の性質があり、その区別はそれぞれの性質とその観念との類似の有無によるとのべ、後半では、それにも拘らず、第二次性質はその観念を生み出す (produce) と主張されている、と。このような解釈は十分なものであろうか。

これを問題にするにあたってはまず第一次・第二次性質の区別の論の歴史的位置を一考する必要がある。<sup>(2)</sup>

史家によれば「第一次性質」・「第二次性質」という言葉そのものはスコラ哲学に由来するという<sup>(2)</sup>（ただしロックのと同じ意味ではない）。また両者の区別自体はすでに古代ギリシア哲学において強調されたところであり、またガリレイやデカルトの説いたところでもあった。だがロックが直接に依拠しているのはボイル、特にその著 *The Origin of Forms and Qualities* (1666) だと言われている。

ボイルの考えでは、物体には延長・不可入性などの第一次性質があつて、それらは運動によって変ることではない。物体がわれわれの感覚器官にはたらかける結果、生み出されるのが感覚的性質 (sensible qualities) である。感覚的性質は本当は物体に属するものではないのに、われわれは幼時から、それらが物体に実在すると想像しがちである。この意味での感覚的性質には色や熱さが数えられるのみならず、形や大きさも含まれる。ボイルの場合まず考えられている区別は、第一次性質と感覚的性質との区別なのである。第一次性質は 'original', 'primitive', 'absolute' などとも言われる。色や香りがあえて第二次性質と呼ばれたとしても、それは第一次性質と同じ次元にあるのではない。前者は物体のもっと単純で原初的な状態、すなわち第一次性質に依存する<sup>(4)</sup>。

言うまでもなくボイルの立場は粒子論（当時の語でいえば corpuscular philosophy）であるから、物体の第一次性質は自然の最小の構成要素としての粒子の固有な性質である。粒子そのものは微小であるため感官知覚の対象にはならないので、粒子についても感覚的性質を語ることはもとよりできない。常識的な次元での物体は粒子の集合に還元されるから、物体についても感覚的性質を帰属させることは誤りであるはずである。われわれがそうした誤りに慣れてしまっているのは、言わば関係と性質との混同にもとづくのである。ボイル自身が出している例でいえば、鍵と錠との関係について「鍵は錠をあける力がある」というとき、それは鍵にひとつの性質を帰属させることではない。鍵に新たな第一次性質が加わるわけではないし、また錠の方の変化によって鍵があける力を失ったといってもやはり

鍵の性質には変化はない。そのように、ある物体が赤く見えるとき、すなわち赤の感覚を生み出す力を及ぼしているとき、われわれは赤という性質を物体に帰属させるのではない。見るのをやめたときに物体が赤という性質を失うということもないわけである。

ところがこの比較では次のような面もある。錠がかかるかあくかは鍵との関係で決まるのだけれども、錠がかかっているとかあいているということは、鍵とは独立に錠の状態として語ることができる。そのように、物の赤さはその感覚を生み出す第一次性質とは独立に、物の状態として語ることができよう。それをボイルは感覚的性質、またはいくらか躊躇しながら第二次性質と呼んだ。

ボイルの考え方の特徴は、感覚的性質の关系的かつ anthropocentric な性格、すなわち感覚器官への依存を指摘することともに、知覚の因果的説明をも可能にするような理論上の枠組としての粒子哲学を仮設することによって、感覚的性質の認識から物理的世界への通路を保証しようとした点にあると思われる。このボイルの考え方とロックのとの類似は、次節にロックの論を引くことによって明らかになるものと思う。

- (1) 『人間知性論』からの引用はヨールトン校訂の版により (ed. J. W. Yolton, Everyman's Library, 2 vols., rev. ed. 1964-66)。<sup>66)</sup> その箇所は巻をローマ数字の大文字で、章を同じく小文字で、節をアラビア数字で示す。フレイザー版 (ed. A. C. Fraser, 2 vols. Oxford, 1894; reprint, Dover, 1959) およびペリンベル・パティンソンの省略版 (ed. A. S. Pringle-Pattison, Oxford Univ. Press, 1924) に比べて、これらのフットノートを利用した。なお以下ロックの引用は断わらなうが、むしろ『人間知性論』からである。

- (2) cf. Aaron, R. I. *John Locke* (Oxford Univ. Press, rev. ed. 1955), pp. 120 sq.

- (3) cf. Buttt, E. A. *The Metaphysical Foundations of Modern Physical Science* (Kegan Paul, rev. ed. 1932), pp. 73 sq. cf. also Hanson, N. R. 'The Dematerialization of Matter', *Philosophy of Science*, Vol. 29 (1962), pp. 27-32.

- (4) ボイルに関する叙述は上記に準じた。Aaron, R. I. *op. cit.* pp. 121 sq.; Jackson, R. 'Locke's Distinction between Primary and Secondary Qualities', *Mind*, Vol. 38 (1929), pp. 56-76 (Reprinted in Martin, C. B. and Armstrong, D.

M. eds. *Locke and Berkeley* [Modern Studies in Philosophy], Macmillan, 1968 [?]; Mandelbaum, M. *Philosophy, Science and Sense Perception* (The Johns Hopkins Press, 1964), chs. 1-2; Harré, R. *Matter and Method* (Macmillan, 1964), pp. 79-85; Burt, E. A. *op. cit.* ch. 6.

## 二

ロックの知識論において「観念」という語が多義であることはよく指摘されるところだが、われわれがここで問題にする「性質」もやはり多義である。最もひろい意味では、物体の性質としては次の三つが数えられる。

(一) 第一次性質。——内容的には、固性<sup>(1)</sup>・不可入性・大きさ・形・数・位置・運動または静止などが挙げられている。これらは知覚されていると否とに拘らず物体において存在する。物そのもの (the things themselves) のうちにあるとも言う。その意味で第一次性質は実在的性質<sup>(2)</sup> (real qualities) とも本源的性質<sup>(3)</sup> (original qualities) とも呼ばれている。

(二) 第二次性質。——これは例えば色・音・香り・熱さ・味などの観念をわれわれのうちに生み出す物体の力 (power) である。ときには感覚的性質 (sensible qualities) とも言われる (II. viii. 14; 23; xxi. 3)。

(三) 本来の意味での力。——例えば太陽には蠟を白くする力があり、火には鉛を熔かす力がある。これはある物体がその第一次性質によって他の物体の第一次性質に変化をひき起すことに他ならない (II. viii. 23)。その結果変化をこうむった物体は以前とはちがった仕方であれわれの感官に作用するようになる。

以上の (一)・(二)・(三) はすべて広い意味で性質と言われるけれども、本来の意味での性質は文字通り第一次性質だけなのである。(二)と(三)は実は『他のものにさまざまに作用する力にすぎない』(II. viii. 23)。(二)と(三)の違いははたらかける対象の違いであって、(三)では一般に他の物体であるのに、(二)では力の及ぶも

のは感覚器官という特殊な物体なのである。第二次性質は、第一次性質と並び称されるようなもう一つの種類の性質を意味するのではない。

それゆえ、色や音は第二次性質だとするのは、ロックの解釈としては間違いとは言いつても誤解を生じやすい言い方だということになる。エァロン (R. I. Aaron) はその責任の大方はロック自身が性質と、その性質の観念とを十分はつきりとは区別していなかったことにあると言う<sup>(4)</sup>。しかしロックは次のような注意書きを加えてもいるのである。すなわち『観念についてときどき物そのもののうちにあるかのように語る場合は、その観念をわれわれのうちに生み出すような客体の性質を意味するものと解していただきたい』(II. viii. 8)。この行文などはロックが観念と性質との区別を(少くともこの文脈においては)よく意識していたことを示すものであつて、このような区別を前提してはじめて、第二次性質の観念は物体の力の結果であるという言明が了解されるのである<sup>(5)</sup>。

ロックのいう力は、今日 *dispositional property* と言われているものに当るとみられる。だが感覚的性質に対するディスポジショナルな分析はそれ自体問題をふくんでいる。例えばロックは色について、それは物体の表面の第一次性質によって決まることをのべ、あわせて『斑岩 (porphyry) は暗闇では色をもたない』とは明らか<sup>(6)</sup> (II. viii. 19) だとしている。ここでの「色」の意味は曖昧である。まず、それが色の感覚を言うのであれば、当の言明はきわめてトリヴィアルなことである。実際、暗闇では斑岩は見えないのだから。だが「色」がある感覚を生み出す物体の力を意味するのであればどうか。このときそれは標準的な条件の下で正常の観察者に対してある経験を生ぜしめる力と限定されていなくてはならない。従つて「暗闇では斑岩には色がない」とは言えないはずである。

第二次性質をディスポジションとして理解しようとするさいの困難は、右のような分析にあらわれる「標準的な」とか「正常な」の意味を、この場合でいえば色の概念を参照することなしに特定することができるものかどうか、という点であろう。そのときの逃げ道の一つは、ロックの言葉でいえば感覚の単純観念の還元不可能性をみとめて、こ

れを知覚の基本的な成分とみとめてしまうことである。もしそれが私的なものならば、それを使って公共的な感官知覚を分析することは本末顛倒なのであるが、ロックではその点はよく考えられてはいないようである。

このように一方では観念としての、例えば赤さの還元不可能性をみとめる反面、感覚的性質は物理学的存在との関係において、因果的に考えられる。つまり知覚の直接の対象は物ではなくて観念だとして、別の枠組のなかで観念と物との関係が考え直されるという形をとる。<sup>(6)</sup>

たしかに、例えばある物質が水に溶ける（可溶である）という傾向は、それは水に溶ける力がある、などと言って済ませるのでなく、その物質の化学上の構造によって説明されるべきであるように、物体が色その他の観念を生み出す力も、物体の第一次性質で説明されることが期待される。力は物体の力なのである。ロックの場合、それは粒子論と結びついて感覚の観念の起源の因果的説明をみとめることになる。<sup>(7)</sup> 例えば『堇は、特有の形と大きさをもつ物質の感覚できない粒子 (particles) の衝撃によって (その粒子の運動には種々の程度と様態があるが)、その花の青い色と芳しい香りの観念をわれわれの心の中に生み出すものになる』(II. viii. 13)。一般に、物体を構成している微粒子が感覚器官に衝撃をあたえると、運動が神経あるいは動物精気 (animal spirit) によって『感覚の座』である脳に伝えられ、心の中に観念が生み出されるのだという。<sup>(8)</sup>

このような因果的・生理学的説明は主にボイルなどから学んだものであろう。ただしロックはそれがいわゆる『観念の新しい道』(the new way of ideas)を逸れ、かれが『人間知性論』の叙述においては避けようとつとめた『心の本性に関する考察』(the physical consideration of the mind—I. i. 2)に立ち入ることになるのをよく承知していた。のみならず、『物体がその感覚される性質の観念をわれわれのうちに生み出すものになるような、物体の特有な構成とその諸部分の配置』を研究することも、すでに『自然哲学』の仕事であって、自分の仕事として引受けたものでないとロックは断わっている。<sup>(9)</sup> だがこのことはロックが物理的实在論にコミットすることを拒んだことを意

味しない。知識論は『記述的で、平明な方法』(historical, plain method—I. i. 2) のみによって尽くされることはできず、以下でものびてゆくように、粒子論的・機械論的な『自然哲学』をその conceptual framework としつづけるという面をふくむのである。

- (1) 第一次性質の枚举にはとまどふ出入りがある。何を第一次性質として数え上げるべきかとこの論点については、cf. Armstrong, D. M. *Perception and the Physical World* (Kegan Paul, 1961), pp. 184 sqq.
- (2) II. vii. 22; 23; 25.
- (3) II. vii. 9; 12; 13; 23.
- (4) Aaron, R. I. *op. cit.* p. 116.
- (5) cf. also II. vii. 22: 『物体における性質と、それら性質によって心の中に生み出される観念との違いをはっきり知ること云々』『観念』と『性質』の定義については、II. viii. 8 なども参照。ただし本文における論点は、ロッキンの 'idea' の用法が、この論点と無関係なものであることは、cf. Ryle, G. 'John Locke on the Human Understanding' in Stocks, J. L. ed., *Tercentenary Addresses on John Locke* (Oxford Univ. Press, 1933), reprinted in Martin, C. B. and Armstrong, D. M. eds. *op. cit.* pp. 16 sqq.
- (6) cf. II. i. 1; I. i. 8; IV. xxi. 4. 「知覚の直接の対象は観念」というこの公式は、ロックを論難したバークリから、下についていわゆるセンス・データ理論にまで尾を引いている。バークリのロック批判は観念と物の関係についてのロック風の説明をしりぞける反面、上記の公式はロックと共有している。そのためバークリの立場がロックに対立する唯一の選択肢であるかのようには信じられてきたのである。なお、バークリについては本文三一頁以下も参照。
- (7) 感覚知覚についてのロックの考えは、因果説というだけでは足りないかも知れぬ。感覚の観念の起源が因果的に説明されるにしても、なお知性の作用とこの perception をまとめたとも考えられるからである。この点については、cf. Hamlyn, D. W. *Sensation and Perception* (Kegan Paul, 1961), pp. 94-98.
- (8) II. iii. 1; vii. 11-12; IV. ii. 11-12. cf. also 'An Examination of P. Malebranche's Opinion of Seeing All Things in God', §§9-15 (*The Works of John Locke* [London, 1823; reprint, Scientia Verlag, 1963], Vol. 9, pp. 215-219). なお、通説 (impulse) による説明は、ロッキンの仕事に於いて補強されたロッキンが信じたこと。cf. A. C. Fraser's note to II. vii. 11.

(6) II. xxi. 73; viii. 22.

## 三

ところで、感覚の観念の起源は微小な物体が感覚器官に及ぼす影響にあるとすれば、そのかぎりでは形や大きさのような、第一次性質の観念も、色や熱さと変りはないのではないかと考えられる。心がその知覚または思考の直接の対象とするものはすべて観念と呼ばれ、そうした観念を心の中に生み出す力が、その力を含む主体（基体）の性質と呼ばれる、とロックが言うとき（II. viii. 8）、形や大きさの観念も、色の観念（あるいは観念としての色）も、ひとしく力の結果だということになる。

このことを別の角度から言うならば、知覚における観念とその原因としての性質は、すでにのべたように、はっきり区別されねばならないばかりでなく、『観念が正確に基体に属する何ものかの像および類似物 (images and resemblances) であると考えることはできない』のであって、それはちょうど名前は観念をよび起すけれども、名前は観念とは似ていないのと同様である（II. viii. 7）。

ロックがこのことの例証として出すのは例の感覚的性質の相対性の論である。例えば火はある距離にあるときはわれわれの中に暖かさの観念を生み出すが、距離がずっと近いと暖かさではなく痛み of 観念を与える。従って暖かさも痛みもどちらも火の中にあったとは言えない（II. viii. 10）。それらは単に『心の中に』あるだけであって、観念以外の何ものかの写しになっているとは言えないとも考えられる。

ところがロックは第二次性質との対比において、第一次性質の観念は当の性質に似たものと明言している（II. viii. 15）。これがもし（マクロ的な）物体の性質とその観念が、原物と写しのように似ているという主張だとしたら、バークリによる次のような批評を免れることはできない。『形や延長も物質のうちに存在する性質の原型あるいは類似



物ではないとなぜ論じてはいけないのか。なぜならそれらは同じ眼にも場所が違えば、また同じ場所でも眼のつくりが違えば、さまざまに見えるのであって、それゆえ心の外の何か一定したものの像ではありえないのに。<sup>(1)</sup>』

だから第一次性質の観念と第二次性質の観念との区分の根拠は、別なところに求められなければならない。注目されるのは、延長や形などの第一次性質は『物体がどんな状態にあっても、その物体から全然切り離すことができない』(utterly inseparable from the body—II. viii. 9)とされている点である。ただしここで切り離せないと言われるのは物体の個別的な大きさや形ではないはずである。第一次性質は分割や力加わるに際してなお保存されるというからには、それは特殊な・determinateとしての性質ではありえないわけで、変らないのは物体がいくらかの大きさであること・何らかの形をもつこと、すなわち determinableとしての性質である。<sup>(2)</sup>

これだけではロックの考えはトリヴィアルなことで評されるかも知れない。第一次性質とその観念の類似を言い、物体から分離できない観念があると言うとき、ロックの念頭にあったのはむしろミクロ的物体の方ではなかったか。第一次性質が物体から切り離されないというのは一方では『知覚されるに十分なほどの大きさを有する物質粒子において感官がつねに見出す』という事実としてのべられているが、他方、微小すぎて個々にはわれわれの感官知覚の対象とならないような粒子についてもなお、心(mind)は粒子からそれらの第一次性質が切り離せないのを見出すと言われている(II. viii. 9)。この立言はもはや知覚の事実の記述ではなくて、むしろそれをも説明するためのものだと言わねばならない。

すでにのべたように、感覚の観念を生む力は物体を構成する粒子の第一次(実在的)性質に依存する。もし理論的に指定されたミクロ的物体に関して、われわれが常識的なマクロ的物体に関して使っている形・大きさ等の言葉でその性質を記述することが原理的に可能だとすれば、その意味で、マクロ的物体の第一次性質の観念の原型(pattern, archetype)はその物体のうちにあるとか、あるいは第一次性質の観念はその像であって似ているとかいう言い方が

採用されたのだと考えられる。それに反して、第二次的性質の観念によって、当の観念の起源であるところの物そのものを記述することは不可能なのである。

第一次性質と第二次性質の区別はこのように自然哲学の理論的な枠組のなかで立てられ、むしろその後には日常的な知覚経験をそのテストとして要求するものである。

(1) Berkeley, G. *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, Part I, §14. ただし、「類似」説に対する正面からの批判としては、同書 Part I, §8 の方が重要であろう。念のため付け加えると、ハークリのこの行文は、それだけ単独では、大きな形も『心の中にある』ことの論証になっているのではない。

(2) cf. O'Connor, D. J. ed. *A Critical History of Western Philosophy* (The Free Press, 1964), p. 211.

#### 四

われわれの感官知覚に戻って考えると、それはさまざまな性質に対応する単純観念を受け入れることに尽きているのではなく、むしろそこでの言明は、常識的な意味での「物」を論理上の個別者として取ることもみられる。そうした「物」を感覚の観念の原因としてのミクロ的物体の集りと同じに扱うことは困難である。このことをロックの論の進め方に即していえば、「物」の観念は、単純観念をその要素とする複合（複雑）観念（complex ideas）の一種として扱われる。実体の観念についての論がそれを含んでいる（「含んでいる」と言ったのは、精神的実体の方はさし当りの論点からは外れるからである）。

複合観念としての実体の観念がどのようにして作られるのかをロックは次のように記述する。『心は……一定の数の単純観念がつねに相伴う (go constantly together) ことに気がつく。これらの単純観念は一つの物に属すると思いきまれば……一つの主体に統一され、一つの名で呼ばれる』(II. xxiii. 1)。その理由は、『これらの単純観念がい

にしてそれらだけで存在しうる (subsist by themselves) を想像できないので、これらがそこに存在し、またそこから結果するようなある基底 (substratum) を想定する習慣がつくのであって、それゆえそれを実体と呼ぶのである』(loc. cit.)。

われわれは金とか馬とかの実体の観念をもっている。これらは一見単純観念のように見えるけれども実は複合的で要素への分析ができる。だがそれらの観念をいかに分析していても得られるのは性質または力の単純観念の集りだけである。<sup>(1)</sup>例えば金という実体については黄色だとか重いか展性があるという。『特殊な個々の種類の実体についてわれわれがもっているすべての観念は、単純観念のさまざまな結合に他ならないのであって、それらの観念は、全体をそれ自身で存立させるような、結合の未知の原因において共存 (co-exist) しているのである』(II. xxiii. 6)。では金という実体の観念とは、性質の諸観念の集りなのか、それともそれらの諸観念の共存の原因の観念なのか。あるいはその両方を含むのか。

実体の観念をその論理上の機能についてみるなら、ロックにおいては次のような考慮があったと思われる。物の性質について語るときわれわれは「SはPである」という形式の言明を用いる。ここでこのPであるところのSは何か? という問を立ててゆくと、Sはさらに別の述語の集りに分析され、結局「 $P_1 \cdot P_2 \cdot \dots$ 」のどれとも同じでないが、それらすべてを支える something がなければならぬ」という考えに滑り込む可能性がある。この something を  $P_1 \cdot P_2 \cdot \dots$  の (与えられた) 諸観念の集りと同一視することは困難だからである。なぜなら仮にそうすればその実体に関して与えられている述語をのべる言明は分析的となってしまう反面、未知の性質を新たに実体に帰するときには誤りになるだろうから。かくてロックは性質をになうがそれ自体はいかなるものによってもになわれることのないものを「実体」の意味とした。そしてわれわれはそれが何であるか (what it is) についての観念はもたず、それがどんなはたらきをするか (what it does) についての混雑した・はつきりしない観念をもつだけだと考えた (II. xxiii. 19)。

ロックはたしかに実体概念の論理的機能に着目している。このことは彼が『人間知性論』第二卷第二十三章において純粹の実体一般 (pure substance in general) と個々の種類の<sup>(2)</sup>実体 (particular sorts of substances) とを区別しようとしたことにもうかがわれる。だが前者の分析を十分に展開することなく、混雜した概念ということで投げ出した結果、実体一般は『何かわれわれの知らないもの』(something we know not what—II. xxiii. 2)と言われるにとどまったのである。正しくは、さきの問は「SはPである」という形式の言明をのべるとき、われわれはどんな種類の概念を用いているのか？」と定式化されるべきであったのに。

ロックの実体論は上記の点と關聯して、別の疑点をも含んでいる。言明の主語—述語形式に対する考察から得られる、ある種の語が果す言語上の役割についての知見が、それとは全く別の問題—感官知覚の認識の客観性の問題に結びつけられているのではないか、という危惧である。もともと、『一定数の單純觀念』の論理的統一としての実体は、属性と対をなして考えられるものであって、觀念の指示対象としての物とは、一緒にして扱うことはできないはずである。ところがロックが実体を『それらの諸(單純)觀念がそこから結果する、ような基体』として想定されると言いかえるとき、それは感覺の觀念についての因果説と結びつくことによって、觀念に対する物そのものという意味への傾斜を生ずるのである。こうした二つの異った論点の読み込みを可能にしたのはやはりすでに触れたような「觀念」の意味の曖昧さであつたろう。共存する諸觀念が統一されるとき、この「觀念」は単に心の作用の直接的対象としての所与をいうのか、あるいはむしろ性質(属性)をいうのかが曖昧なのである。

『人間知性論』第三卷で説かれる「実在的本質」(real essence)と「名目的本質」の区別、特に実体の概念に関するその区別は、同書第二卷での実体論を補うものとして重要であるが、ここでは先にのべた実体概念の二つのはたらしの振り替わりが問題になるという意味でも注目しなければならない。

実体の名目的本質 (nominal essence) とロックが呼ぶものは、物の感覺可能な性質の集り・結合である。だから

ある実体の名目的本質は、その実体の名があらわす (stand for) 複合觀念だとも言える (III. vi. 2)。<sup>(3)</sup>ところが名目的本質を構成する單純觀念は、すでに見てきたように、物体の『感知できない部分の構造』(the constitution of the insensible parts—III. vi. 2) に依存しているのであって、このような物体内部の微視的要素のなす構造こそその實在の本質 (real essence) に他ならない。<sup>(4)</sup>ここではロックの『粒子哲学』に対する支持がはつきり出ている。それは同時に、種や類は名目的本質のみにかかわるのだから、それらを基準にする知識はコンヴェンショナルなものにすぎないという批判を背景にして主張されたものであった。

ロックは実体の實在的本質がわれわれには知られないということをしばしば述べている。<sup>(5)</sup>このことに焦点を合わせると、實在の本質を『何かわれわれの知らないもの』とされた実体一般と結びつけて考える人があるかも知れない。実体は感覺的性質を共存せしめる『原因』だとも言われ、また實在の本質は名目的本質を成すような諸觀念が『依存し』あるいはそこから『流出する』ところのものとも言われているからである。われわれはロックが實在の本質を基体と重ね合わせて理解しているとは信じないけれども、少くともロックは混乱の原因を残したと思える。かのバークリのロック批判はロックにおける二つの考え、すなわち共存する諸性質の統一としての実体と、觀念に対応する客観的なものを『物質的実体』(material substance) という一つのものに重ね合せるという誤りをおかしている。この点について言及しておきたい。<sup>(6)</sup>

バークリはロックの実体論および第一次性質・第二次性質の区別の論を次のように解釈した。『哲学者が競って求める物質 (matter) とは、何か理解できない或るものであって、われわれの感官の下に入る諸物体がそれによって互に区別されるような特殊な性質を何ひとつもっていない。<sup>(7)</sup>この「物質」は直ちに「物質的実体」と言い換えられる(因みに、ロックはこの語をほとんど使わない)。第一次性質・第二次性質の考えはこの物質的実体に結びつけられる。『物質は無力・無感の実体 (inert, insensible substance) だ、そのうちに延長・形・運動などが現実存在する

と「ロックなどの説は」解すべきである。<sup>(6)</sup>「*ハ*」で第一性質と物質（的実体）の関係を問うてみると、『物質は延長を支える基体である<sup>(7)</sup>』（that matter is the substratum that supports it [extension]）としか言えないだろうとバークリは言う。ここからは彼はロックの実体一般に関する見解を巧みに取り込む。バークリによれば、「実体」という言葉を通俗の（vulgar）意味にとって、感覚的性質の結合をいうのなら別だが、『哲学的意味』に解して、性質を支えるが自体は何の性質をもたぬ或るものが実体だとするなら、「実体」とか「支える」の意味はわからないと言うほかはない。<sup>(8)</sup>物質（的実体）なるものは想像においてすら存在しないというわけである。

バークリは事実、実体の概念の分析においてロックよりも一歩を進めていると思える。『骰子は固く・延長しており・四角だと言うことは、これらの性質を、それらとは区別されるがそれらを支える主体（基体）に属せしめることではなくて、「骰子」という語のひとつの説明にすぎないのである<sup>(9)</sup>』というような行文はそれを示している。たしかに、骰子は固い、というときわれわれは実体にひとつの属性を帰属させるのだというのは、「骰子」という語の用法についての、誤解を生じやすい断わり書きにすぎない。だがこうした分析は、『性質というのは感覚または観念にほかならないのであって、それを知覚する精神のうちにのみ存在する<sup>(10)</sup>』というような思想とは、別の問題なのではないか。先にのべたようなロックにおける「観念」の意味の曖昧さをそのまま引継ぐことによってバークリは二つの問題——すなわち実体—属性（性質）の問題と、感官知覚の判断の客観性の問題——を重ね合わせた。「ものは観念の集りにすぎぬ」という公式は、「観念」の意味によってはどちらの問に対する答にもなる。バークリは、性質と対をなす実体の概念を批判すると同時に、それを物質的実体もしくは物質と読みかえてしまう。そして実体の否定が、ロックのみとめた観念に應ずる實在（具体的に考えると外的物体といってもいい）を斥けるという意味をもつかのよう論じてゆくのである。しかし歴史上のロックにはバークリの批判するような「物質的実体」の説は存在しなかった。ロックにおいては、性質の未知の支持者とされた実体一般の観念と、名目的本質と対比される意味での実体の未知の

実在的本質とは、十分明確に区別されたのではないにしても、議論としては擦れ違っていると思われるのである。

- (1) 厳密に言えば、関係の複合観念なども含まれることがある。
- (2) cf. II. xxiii. 3. cf. also Aaron, R. I. *op. cit.* p. 173.
- (3) III. iii. 15; 17; IV. iii. 14.
- (4) この論域の発展や上記は賣いづる。 Bennett, J. 'Substance, Reality, and Primary Qualities', *American Philosophical Quarterly*, Vol. 2 (1965). Reprinted in Martin, C. B. and Armstrong, D. M. eds. *op. cit.* pp. 86-124. cf. also his *Kant's Analytic* (Cambridge Univ. Press, 1966), pp. 182 sqq.
- (5) Berkeley, G. *op. cit.* §47.
- (6) *Ibid.* Part I, §9.
- (7) *Ibid.* Part I, §16.
- (8) *Ibid.* Part I, §§16-17.
- (9) *Ibid.* §49.
- (10) *Ibid.* §78.

## 五

物体の観念およびそれと結びつく感覚の単純観念についての性格づけは、物体に関する認識の起源に関係するものであった。その『確実性と範囲』はこれにもとづいて『人間知性論』第四巻で論じられた。最後にこの点について簡単にのべる。

ロックが広義の知識を『観念相互の一致・不一致の知覚』と分析し、さらにその形式に四つを挙げたことは周知の通りである。物体に関する言明は、そのうちの観念の共存 (co-existence) にかかわる。実体についての知識は大部分この形式に従うと言っている (IV. i. 6; iii. 9)。例えば金には展性がある、という知識は、展性という観念が黄色・

重い等々の諸観念に『つねに伴い、結びついている』こと、すなわち共存の知覚に他ならない (IV. i. 6)。主体 (実体) における性質の共存は、その実体の名があらわす複合観念 (すなわち名目的本質) における単純観念の共存にと引き直される。

ロックの考えでは最もすぐれた意味での知識は、観念相互の関係についての直知もしくは論証による知覚である。内容的には数学および道徳法則がそれとみとめられている。これらとの対比においてロックは自然研究の経験的性格をくりかえし強調した。

自然認識において実体とその性質に関する言明は知覚経験そのものの報告でもなければその一般化でもない。単純観念の共存という規則性は、物理的存在としての物体に関する仮設によつて説明されなくてはならない。たしかに物体については名目的本質と実在的本質とは一致が得られない。『実体の知識と区別をめざしてわれわれの能力で行けるところはたかだか、実体のうちに観察されるような感覚的観念の集りまでにすぎない』(III. vi. 9)。そして『われわれは実体の諸性質がまさに依存している、微小な部分の実在的構造 (the real constitution of the minute parts) を知らなく』(IV. iii. 14)。

物体に関するわれわれの認識の範囲が、その成分である観念の範囲よりもはるかに狭いのは、単に物体の『真の内部構造』が人間の感覚器官の制約のために発見できない<sup>(1)</sup>ことによるのではない。重要なことはむしろ、実体の名目的本質をなすものが多くは力である点である (既に論じたように第二次性質もじつは力であった)。力はさらに物体の第一次性質に依存すると言われる。しかし、その観念と、感覚に与えられる力の結果としての観念との因果関係は、一般には事実上のことであつて、論証されてのことではない。その間の関係を『必然的結合』(necessary connexion) と言つてはみてもそれは論理上の必然ではなく、ごく少数の例外を別にすると、『明らか』(evident or visible) な<sup>(2)</sup>として知覚されはしないのである。経験の示すところでは金の観念は黄色の観念とつねに結びついで



るけれど、金が青いと言ってもそのことは自己矛盾ではない。

われわれに可能なのは結果としての若干の観念の共存という経験から、その原因としての物体へと溯ることである。経験は物体に関する信念のための言わば帰納的証拠 (inductive evidence) なのである。外的物体に関する認識が『観察と経験』の枠をほとんど越えることができないとロックが言うのはそのためである。自然学においては論証的方法は採用できない。『われわれには、周囲の物体、またわれわれの一部を成している物体〔身体〕についての哲学的知識は不可能である。物体の第二次性質・力・作用に関しては、普遍的な確実な知識を有することはできない』(IV. iii. 29)。

自然認識に対するロックの態度は、その数学的・論証的学問との区別を明らかにし、経験的性格に注意を向けたものと一般に評価されている。しかしこのことを拡大解釈して、外的世界の認識についての懐疑的態度をロックにおいてみとめるのは権衡を失した見方であろう。『物体に関する知識においては、われわれは個別的な経験から集められるものを集めるだけで満足しなければならぬ』(IV. xii. 12)とロックが言うのはむしろ方法論上の心がけであり、そのように言い切れるためにはロックが当の『物体』に関する『粒子仮説』(the corpuscular hypothesis) という實在論的な説明の枠組の有力さをもとめていたという一面を見落すべきではあるまい。『粒子哲学』の排撃に努めたバークリが、自然学における「説明」の意味をあらためねばならなかったという事実は、かえってロックの立場における理論と経験との関係を示唆していると言えよう。<sup>(3)</sup>

(丁)

(1) II. xxiii. 37.

(2) IV. vi. 5-11; iii. 28.

(3) Berkeley, G. *op. cit.* §§105, 62. バークリの考えでは、「説明」は現象を一般的規則に還元することである。

(筆者、金沢大学法文学部〔哲学〕講師)

idea of a "creatio ex nihilo" seems to be the conception of "non ens" as opposed to "ens". This does not mean of course that this "non ens" is already imagined as a "nihil", for it still remains a sort of "ens", but it implies nevertheless an inference towards the absolute "nihil".

2-As for the contribution of the Hebrew religion, it seems to have come from a transcendent conception of the absoluteness of the divine power of Yahveh. This divine power was believed by the Hebrew religion to be so omnipotent that it could not be thought of as presupposing anything like matter for the creation of the world.

3-Finally, under the impact of Hellenistic speculation, the encounter of Greek philosophy with the Judaic teaching, combining the idea of the absoluteness of a divine power creating the world from "nothingness" with the Greek conception of a "non ens", succeeded in coining this new expression of a "creatio ex nihilo". We surmise that the absoluteness of the divine power as conceived by the Hebrew religion brought the Greek philosophical conception of "non ens" far beyond its original meaning by adopting in its stead the new word "nihil".

## **Ideas, Qualities and Substances in Locke's Philosophy**

*by Jun'ichi Tsuchiya*

This paper is concerned with Locke's view on the relation between the physical world and the data of sense.

In the first three sections I attempt to clarify the meaning of the distinction between primary and secondary qualities. It is pointed out that secondary qualities are not mental states, but the power or dispositions of the physical micro-objects, and that the distinction is significant only if it has the "corpuscular philosophy" or atomism as its background theory.

In the fourth section of the paper I expound an analysis of what Locke said about the idea of substance and its relation to his theory of the physical world. Locke's concept of substance is, in its proper sense, logical.

Berkeley, however, in his attack upon physical realism, confused substance in the logical sense with physical reality. The ambiguous character of “ideas” in Locke is closely connected with Berkeley’s mistake. (For this interpretation I am much indebted to Jonathan Bennett.)

The paper concludes with a short comment on the relevance of Lock’s physical realism to his theory of knowledge which is stated in Book IV of the *Essay*.

## The Problem of Universals

by Narahide Asano

It is the aim of the present study to examine, from a logical point of view, Plato’s theory of Forms and compare it with the theories of universals of Aristotle and contemporary analytic-philosophers.

The main contents are as follows.

- (1) An explication of Plato’s use of the word ‘being (ὄν)’.
- (2) The properties of the relations of *σύμμεξίς*, *κοινωνία* and *μέθεξις* between Forms and of the relation of *μέθεξις* between Forms and sensible objects.
- (3) Criticisms on the theories of universals of Aristotle, B. Russell and J. M. Bochenski.
- (4) The distinction between general words (i. e. common nouns, verbs, adjectives and so on) in ordinary language and general terms (i. e. predicate signs and signs for sets) in logic and set theory. This is concluded from an examination of Quine’s extentionalism, taking Wittgenstein’s view on universals into consideration.
- (5) The distinction between Plato’s Forms and Aristotelian universals (attributes).
- (6) The distinction between Plato’s Forms and sets.
- (7) Platonic interpretation on predicate signs and signs for sets.